



マ井エツト氏述
地租ヲ減削シテ酒類官賣ヲ行フ説

第一号
扣本
壹



3001



M14
A 2058



第一條 金税

竊カニ熟察スルニ日本ノ地租ハ明治年間ニ至リ五個ノ條件ニ於テ更ニ田時ノ制ヲ一変セリ其要略則チ左ノ如シ

第一 地租減下

第二 日本全国地租平等

第三 過ナルモノハ之ヲ削リ不足ナルモノニハ之レニ加フ

第四 穀税ヲ廢シテ金税トス

第五 年々不同ナル收穫高ヨリ若干部分ヲ上納セシムル法

ヲ廢シ更ニ確定ノ地價ニ應シ永久不変ノ税ヲ定立セラレタル事

右五個ノ改正ハ孰レモ重大且ツ嘆賞スベキ進歩ト云ハザル能ハス就中其第一第二第三項ハ殊ニ其然ルニ於テ疑ヒナシト魚

大正十一年四月
大隈侯爵邸寄贈

其第四項第五項ニ至テハ實際豫メ推定シ難ハザリタル不都合
有ルヲ覺フレ如シ今之ヲ左ニ論辨セント欲ス
第四項ニ所謂米穀稅ヲ廢シテ金稅ト爲シタルハ之ヲ上ニシテ
ハ國家財政上ニ於テ便益ノ大ナルヤ限ナシ第一米穀ノ蓄積ニ
関スル許多ノ勞費及ヒ受渡監督ノ煩冗ヲ省キ殊ニ穀價昂低ノ
差ヨリ生スル影響ヲ以テ大藏ノ豫算ヲ誤ラシマルノ患ヲ免カ
レシハル等就中此取後ニ陳フル事由ハ蓋シ米納ヲ廢シテ金稅
ト爲セル尤モ緊要ノ点ニシテ凡ソ歐洲各國印度北亞米利加其
他萬國大抵倉ナ金納トセル事由ノ齊シク係ル處トス
更ニ轉シテ之ヲ下ニシテ人民ニ執テモ亦金稅ノ利益蓋疑無シ
凡ソ歐洲各國ニ於ケル如ク穀價ハ漸々騰貴ニ至ルヘノ隨テ農
民ハ其鬻賣セル米穀ヨリ多クノ代價ヲ得歲入稍々増加シ而シテ
府ニ納附スル所ノ稅價ハ則チ尚ホ前日ノ數額ヲ變セサルヲ以

テ畢竟幾何ノ稅價ヲ減セルニ當ルベシ
第五項ニ掲クル變化則チ年々不同ノ收穫高ニ就テ其若干部分
ヲ收納セシムル法ヲ廢シ更ニ確定ノ地價ニ準據シ永久不變ノ
租額ヲ定メラレタルハ則チ年々全國上納高總計ニ生スル不同
ヲ一變シテ永久一定ノ高ニ歸セシメタルモノニシテ蓋シ同價
理財ノ秩序ニ於テ其進歩ヲ得タルヤ確トシテ疑無シ地稅ヲ定
メラシ永ク同一ナラシメタルハ已ニ歐洲各國皆ナ之ヲ行ヒ得タ
ルナレバ今者日本ニ於テモ亦之ヲ行フノ必ス難キニ非ザルヲ
知ルナリ
然レ凡ソ第四項第五項ニ掲クル日本地稅ノ改正ニ於テハ亦
其事ヲ見ハセリ則チ政府ガ其改正ノ目的ヲ達セシモノハ唯タ
所謂國家財政ノ秩序ニ歸セシ一点ニ止マリ其農民ヲシテ納稅
ノ便益ヲ得セシムルノ目的ニ至テハ蓋シ未タシキナリト云ハ

ザルヲ得ス現ニ目今農民ノ納ムル所ハ往時ニ比ハレハ其量頗
著シク減殺セルトイハレ農民ハ猶ホ徵収ノ苛酷ヲ訴フル者有
ニ非スヤ

第四項ニ對スル論 巨額金税ノ徵収ニ供スル為メ農民ハ其
鬻賣ニ付スヘキ米穀ノ大部分ハ一時ニ奉ケテ賣却シ尽サシムル能
ハス甲村ニ乙村ニ比々皆テ競テ賣ルヲ求メ供用一時ニ増加シ
テ目下需求ノ平均ヲ起ルニ至リ於斯子或商機ニ投シテ壟斷ヲ
專ニシ商人ハ賤價ヲ行ツヲ得ルモ農民ハ貴價ヲ行ツ能ハス弊
ヒ米價下落ニ向フモ農民ハ之ヲ願ルニ違ナク唯々卑賤ノ代價
ヲ以テ賣却セサル能ハス他無シ之レ獨リ金税収納ノ為メ各々
収獲ノ大半ヲ一時ニ換賣セサル能ハサシムルモノナリ然
ラハ則チ今此弊ヲ矯正スルニ將サニ如何ノ方法ヲ用ヒントスル
歟曰ク往時穀税ノ日ニ方リ秋獲ノ後一時ニ之ヲ徵収セシモ人

民ハ其収獲シ得タル物ヲ以テ容易ク之ヲ納メ更ニ苦情アル
ナク官亦能ク是ニ據テ納額ノ完全ヲ求クルヲ得タリト然レ一
且変シテ之ヲ金税ト為セシ以上ハ米穀ヲ変シテ金円ト為スベ
キ時ヲ与フレ為メ全年ヲ數多ノ稅期ニ分テ十二月ヲ行テ其
全額額ヲ上納セシムルヲ良トスベシ字國ノ地租ハ既ニ昔テ述
ヘシ如ク純益百分ノ唯々四割ニ分一厘即チ全収獲高ノ唯々〇
八分四厘二毛ノミナルが猶ホ年々之ヲ十二回ニ分布シテ収納
セシムルヲ至要ノ事トセリ則チ毎月上旬八日以内ヲ以テ全年
地稅十二分一ヲ納メシムルトス今日本ニ於テモ此法ヲ施行
セラレ、井ハ蓋シ農民ヲシテ其地稅ヲ納ムル為メ一時ニ其米
穀ヲ賣却セサル能ハサシムル患害ヲ脱セシメ能ク之ヲ一周年中
相当ノ需求ヲ行テ鬻賣スルノ便ヲ得テ其代價ヲ得ルヤ又多キ
ニ至ラシムベキ歟

第五項ニ對スル論 現今制定セル日本地稅 如何ニ苛烈ナ
ルヤヲ先ニ辨セント欲ス

往キニ曰ラデルヒヤニ於ケル萬國博覽會ニ出サレタル日本地
藉中其第百四葉ニ謂フ有リ曰ク全國中最上沃土ノ一ニ居ル肥
後州ニ於テハ山城村近傍、最上地ハ豊年ニハ尠クハクター
ニ三千七百三十九リテ又凶年ニハ一千八百九十尠リテ
以下ノ表ニ記セル合印ナリヲ登ラシム同州中寂瘠惡地ハ各ハクター
ル毎ニ豊年ニ一千八百九十尠リテ又凶年ニハ一千五百八十
貳リテル^(四)ヲ止ス又地味ニ於テ別ニ次饒ノ名有ラザル武州ニ
在テハ州中ノ最上地ハ豊年ニ平均尠ハクタール毎ニ三千〇九
十貳リテル凶年ニハ同地積毎ニ一千四百六十五リテル^(ハ)ヲ止
スト由是之觀レバ凶豊收獲ノ互ニ相ニ懸隔スル實ニ甚ク從
テ土地賣買價ノ本ニシテ兼テ地租賦課ノ比準ト為サレタル早

均全收獲高ハ更ニ凶年ノ秋実ヲ超ユルヤ廻カニ甚ク遠ク地租
賦課ノ比準數以下ニ在ラサル能ハス設令ハ上ニ掲クル一二州
ノ收獲高ノ平均中數ハ地租賦課ノ本タル平均收獲高ト視ル時
ハ其凶年收獲高ニ超ユルノ比例尤ノ如シ

①	三千七百二十九リテ平均	二千八百十リテ平均
④	一千八百九十尠リテ平均	一千七百六十三半リテ平均
⑤	一千五百八十貳リテ平均	一千七百六十三半リテ平均
⑥	三千〇九十貳リテ平均	二千六百七十八半リテ平均
	一千四百六十五リテ平均	二千六百七十八半リテ平均

今假リニ地租ノ一割即チ平均収獲高ノ二五厘上モヲ執ルト見做シ年々積テ之レヲ豫備金ト為ス井ハ蓋シ国内一般ノ飢饉災厄ニ遭逢スルトモ猶ホ該金ヲ以テ納税ニ充テ聊カ人民ノ義啓ヲ欠クコトアルベカラズ加之守固ニ於ケン如ク因厄ニ際會セシ者アル井ハ亦為メニ非常ノ振恤ヲ為シ得ベシ但豫備資金ハ全国及ヒ縣郡寺ノ如キ區分ニ循テ其蓄積ヲ殊ニスベシ則チ

二厘五毛

國稅豫備資金

八厘

縣稅豫備資金

壹分五厘

郡稅豫備資金

總計

二分五厘五毛

郡稅豫備金若シ不足ナル時ハ縣稅ノ豫備金ヲ用ヒ又縣稅豫備金ハ不足ナル時ハ國稅豫備金ヲ用ヒ得ベシ

郡稅豫備金ヲ用フルニ方テハ郡會之レヲ決定シ縣令其可否ヲ司トル

郡會ノ申立ヲ以テ縣稅豫備金ヲ使用スル井ハ縣會之レヲ決定シ縣令其認可ヲ司トル

縣會ノ請求ヲ以テ國稅豫備金ヲ使用スベキ井ハ太政官ニ於テ之レヲ決定ス

郡稅豫備金ハ唯々國庫ニ納ムヘキ地租ノ欠ヲ補フベク又縣稅及ヒ國稅豫備金ハ郡稅豫備金ノ窮耗ニ方テハ亦齊シク稅額ニ

充テラレ、事有レベシトイヘ氏再餘ハ太抵前ニ述ベシ如キ災害已ムヲ得サル場合ニ臨ニ納稅者ヲ保護シテ角ク耕耘スルヲ

得納稅ニ耐ヘ得セシムベキ非常振恤費ニ充ツルノミトス此各種ノ地租豫備金ハ公債証書ニ換ヘ貯ヘテ以テ利ヲ積ムヲ

得ズ、或ハ是レヲ以テ農事經濟ノ進歩ヲ促シ以テ農事經濟

ヲ勸奨スベキ銀行ヲ設立スル等其ノ方法ノ得失如何、僕將ニ
他日ヲ待テ謹テ之ヲ辨セント欲ス

以上論辨セル二箇ノ巨款法(即チ地租納付ヲ毎月ニ分算スル)
及ヒ地租豫備金ノ設置是レナリハ以テ稍々金税ノ苛酷ヲ減殺
シ得ベシト、然レ若シ政府ハ更ニ豫備金ヲ課スルヲ以テ或ハ益
々農民ヲ困ムルトナシ之レヲ欲セサル時ハ即チ目今ノ税外別
ニ之レヲ課セス唯々従来ノ地租中ニ就チ其ノ若干部分ヲ執テ
之レニ充テサルハカラズ更ニ詳言セハ政府ハ凶年ニ於テモ人
民ノ苦情ヲ聞カス能ク一定ノ地租ヲ得ルヲ確カナラシムル
為メ毎年地租入額ノ内若干部分ヲ減殺シテ之レヲ地租豫備金
ニ備フルヲ要ス、故令ハ上ニ地租豫備金ノ蓄積ニ付キ陳べタル
如ク目今ノ税額十分一ヲ以テ豫備金ニ充ント欲スルハ明治
二十二年ノ地租入額豫算ハ四千〇三十七万三千九百三十五円

ナレヲ以テ其ノ内一割則チ四百三万七千三百九十三円五十銭
ヲ減スベシ然ラハ則チ此ノ減額ハ果シテ何ヲ以テ補充セント
スレカ僕今之ニ應シテ酒類專賣法ヲ設立シ以テ其ノ欠ニ充テ
ント云ハンノミ

第二條 金税及ヒ穀税

日本大藏省ハ国税地租ヲ金納ニ改ムルニ方リ、嚴酷ニ之ヲ次行
スルヲ欲セス却テ其ノ半額ハ便宜ニ從ヒ米納タルヲ許サ
レタリ、抑此制ヲ立テテレタル原旨ニ於テハ僕深ク其ノ至当ニ
感ス、蓋シ地租納付ノ為メ農民ノ其ノ米穀ヲ奉ケテ一時ニ賣却
シ尽サバハ能ハサル疾苦ハ是レヲ以テ其ノ半ヲ減シ隨テ難賣
ニヨリ商人ヨリ得ル所ノ金圓モ自ラ多ク、地租ヲ納ムル又幾分
カ容易ナルヲ得タルマシ

然レド猶ホ茲ニ二箇ノ弊害ナキ能ハズ請フ之ヲ云ハシ

日本	一千八百七十八年	右假定純益中	三十一
英吉利	一千七百九十八年 <small>以未地租ノ一部ハ之ヲ廢シ一部ハ大ニ之ヲ減下ス一千六百九十三年ヨリ一千七百九十八年ヲ右假定純益中</small>	十六、四、分、一	十六、四、分、一
奧地利	一千八百五十七年	假定純益中	十六
白耳義	一千八百五十九年	同	十一、五
同	同	實益中	
撒遜	自一千八百五十八年至一千八百六十年	假定純益中	九
バーデン	同	同	八
ヴュルテムベルグ	同	同	七、四、分、一
ハノーヴン	一千八百六十六年前	同	十一
同	同	實益中	八、三、分、一
佛蘭	一千七百九十年末	假定純益中	二十
同	同	實益中	六
手滿生	一千八百六十五年	假定純益中	九、五

故 = 日本ノ地租ハ歐洲中各文明國ニ於ケル地租ノ純益ニ對スル割合ト相比較スルハ蓋シ二倍乃至七倍ノ多キニ至リ日本地稅ノ半額則チ金納ニ優シモノノミニテモ已ニ重稅ノ名有ル

奧國ノ地租ト殆ント相上下スルニ至リ而メ之レヲ學國ノ地租ニ比スレハ三倍乃至四倍ノ多キニ及フ蓋シ爰ニ揚々ルモノハ純益上ノ比較ノミ若シ更ニ全收穫高ヲ執テ各國一般相比較スルハ頗ラニ其ノ割合尙ホ甚々相逕度スルナルデシト由ルハ

ラウハ其ノ計算ニ供スヤキ材料ノ乏キヲ以テ已ムヲ得ス唯々學國ノ全收穫高ノミヲ執テ相比較セント欲ス

佛國將官「レナヤンド」氏ノ著書「日本進歩史」第二百十八葉ニ據テ見ルハ日本ノ平均全收穫高ハ地所賣買價ノ一割一分六五ニ當ルト由ルハ又僕輩ノ親シク聞ク所ニ據レバ已ニ前ニ記セ

同 實益中 四、五

一 如ク二分五厘ノ國稅ト五厘ノ懸稅ヲ集メ都合地價ノ分ノ三
 ヲ以テ地租ニ充テラレタリ如ク同氏ノ説ト相違セリ
 故ニ地租全収獲高ト相比較スルハ十一、六五ト三トノ對數ニ
 當リ更ニ詳言セハ日本ノ地租ハ全収獲高百分ノ二十五半ニ當
 ルナリ而シテ字回ニ於テハ「エングル」氏ノ統計新報ニ據ルニ唯
 全収獲高百分ノ〇、八四ニ當ルノミナルヲ以テ日本ノ地租ハ
 全収獲高トノ割合ニ於テ字回ヨリ三十倍ノ多キニ及ブナリ
 右ノ如ク巨大ナル地租ノ全額若シクハ唯々其ノ半額タメ之レ
 ヲ金納セシムルハ金田ノ融通物品ノ運輸及ヒ賣捌ノ便利等
 未タ充分ナラサル固ニ於テハ勢危險ヲ免カレ難カラシムル
 僕ノ目シテ危險トナスモノハ日本農民ノ不平等ハ一揆反乱等
 ヲ生センコトヲ云フニ非ラズ唯々經濟上ノ替取廢靡ニ至ルマキ
 一ヲ指スニ在ルノミ然リ而シテ日本ニ於テ未タ此徵候ノ判然セ

一 所以ノモノハ全ク金稅施行ノ日尚ホ淺キニ由ルモノニシ
 テ若シ此ノ如キ巨額ノ地租ヲ蒙ルル數年ノ久シキニ及ブハ
 假令ヒ其ノ半ヲ米納ニストイハ氏蓋シ復タ印度ニ於ケル如キ
 弊害ヲ視レニ至ルナラン
 印度及ヒ日本ハ地租ノ景況甚タ能ク相ヒ似タリ兩國トモ殊ト
 ニ米穀ヲ以テ第一ノ産物トシ共ニ面積耕作ヨリハ寧ロ地力耕
 作ヲ主トシ氣候地味兩ナカラ其ノ宜キニ適シ地租高フシテ以
 テ歲入ノ大半ニ充ツル等最モ其ノ相ヒ似ルモノトス則チ兩國
 ノ歲入左ノ如シ

印度	地租	全歲入	歲入百分中地租高	平均數
一千八百六 十三年	一千九百五十七万四千七百七十九	四千五百一十四万三千七百五十二	四十三、四	
一千八百六 十四年	二千〇三十三万四千二百三十三	四千四百六十一万三千〇三十二	四十五、五	四十四、三
一千八百六 十五年	二千〇九十一万五千〇六十一	四千五百六十五万二千八百九十七	四十四、	

日本

一千八百七十八年

四千〇三万三千九百三十五円

五千三百二十七万九千九百三十六円

關稅

八百〇七万四千七百八十七円

八百〇七万四千七百八十七円

合

四千八百四十四万八千七百二十五円

七十九

地租ノ高ヨリ着目シ来レハ蓋シ日本ハ字國ヨリハ寧ロ印度ニ類似セルモノト云ハザルベカラズ但シ字國ニ於テハ一千八百七十八年度ヨリ同ク七十九年度ニ至ル餘算表ニ就テ見レハ地租ノ高ヲ四千〇二十万〇八千マルクト全歳入高ヲ六億七千五百五十九万二千百十六マルクトス故ニ地租ハ全歳入百分ノ六ニ居ルノミ又印度ニ於テハ全歳入中地租ヲ百分ノ四十四ニトシ日本ニ於テハ百分ノ七十九トス就中日本ノ地租其ノ金納ニ係ルモノ而バヲ執ルモ尚ホ全歳入中殆ント印度ノ地租全額ノ割合ト相ヒ早急スルニ至ル然ラハ則チ此ノ金税ハ其ノ結

品終ニ印度ノ金税ト同一轍ニ歸スルモ亦タ知レバカラズ其印度金税ノ結局ハ果シテ如何ナルモノゾヤ

印度國內ノ景況ニ関シ官報ニ本ツキ英國ニ於テ編纂セラレタル一書ビビロプル、オフ、インジャニ據レバ其ノ慘狀則チ尤ノ如シ

其言ニ曰ク印度ニ於テ農民ノ間尚ホ僅カニ遺存セル自立ハ年々漸ク埋滅ニ向フ今ニシテ若シ匡救ノ術ヲ施サバレバ農民ハ蓋シ數年ヲ出テスシテ概チ零落ニ備夫使下ト為ルノミナラズ然リ而メ此ノ禍害ハ重税ノ害之レヲ翼成スル一ホ少ナカラズ彼ノ農民獲作ヲ業トスル者ハ若シ資金ヲ借ルニアラザレバ又物ヲ産クニ能ハザルニ至ル是ノ故ニ一ニ、双税委員ハ農民ノ擇ニ委子仕時ノ如ク其ノ地租ヲ裁納タラシムレトテ許スノ賢ルニ如カスト謂フモ、有リ顧フニ金円貸與人ノ利手ヲ破却

レテ農民ノ自立ヲ保存スルノ策ハ其レ茲ニ外ナラザラン歟
カン、リヲト社新報

又曰ク農民若シ金田貸与人ニ頼ルノ外一モ他ニ之レヲ調達シ
能ハザル場合ニ於テ官府ハ假令ニ故意ナクモ若シ忽チ米細ヲ
廢シテ金細トシ蠶再タル愚民ヲ驅テ斯ノ如キ状態ニ至ラシメ
シハハ則チ當サニ之レヲ如何スベキヤ云々

又曰ク印度内地ニ於テ窮民ノ金ヲ借ルモノハ三割六分、四割、五
割、六割、或ハ加之元利同敷ニ至リ甚タレキハ元金ノ二倍三倍、
利子ヲ以テ金田ヲ借ルテ我英國ニ於ケル三久五厘四久五久六
久多クモ一割ニ超ハサル利子ノ如ク之レヲ尋常視セリト云フ

若シ此事果シテ実ナリトセバ蓋シ印度ハ魯國ノ吞并スル所ト
ナラザレバ則チ射利者ノ攻略スル所トナラン(第百四葉)
又曰ク印度人民ハ太抵皆チ貧民ナリ樂歲ニハ漸ク其ノ税ヲ納

得ルモ凶年ニハ全ク納税ニ耐ハス凡ソ三年毎トニハ諸縣大

半延細ヲ許サザル能ハス且ツ毎年一縣乃至數縣ノ必ス凶年ニ
遭フ者アリト此ノ言ヤ能ク印度地方ノ状態ヲ盡セリト謂フマ
ク蓋シ何人ノ演フレ所ナルヲ尋ヌルニ議員中演說家ノ言ニ非

ス代言人ノ放言ニ非ス歴史家又ハ新聞記者ニモ非ス是レハ之
レ我カ大英國ヨリ印度地方ニ派遣セラレ殆ント佛蘭西人民ノ
二倍ニ及ベル英領人民ヲ管轄セル統領ノ言ナリ則チ印度人民
ニ参政ノ發言權ヲ有セシメ代議士タルヲ許シ弘ク教育ヲ加

ハ道路ヲ闢キ自由權カヲ付シテ其ノ所有物ヲ保存スベカラシ
メタル等此地ノ人民ヲ保護提擡セシ人ノ語ナリ(第百九十
四葉)
世界中尤モ勉強ナル人種ノ一ニ齒セル此人民ニシテ殊ニ地球
上第一等ノ巨評ヲ受クルノ地ニ住ミナカラ斯ル萬國ニ此ノ貧

窮タルモ其ノ故何ッヤ全国ノ人民飲食幣ニ足ルコトク時々
又饑渴ノ極點ニ瀕スルモノハ其ノ故焉クニカ在ル(第二百葉)
印度ヲシテ斯ル衰替ニ至ラシメタル事由ノ大主眼ニ係ル金税
(在印度ノ衰替ハ又他ニ原由ナキニ非スト要事ヲ望ミ稅ニ是レ由ルナリ)
無ニノ事由ニ非人且ツ改正ニテ傍ラ稅ヲ許シタリトイフ也
ハ如何ニ害患多キヤブ提示セル上文ニ就キ更ニ僕ハ日本ニ臣
額ノ金税ヲ定メラレ而メ又嚴ニ利息制限法ヲ設立セシモノハ
弊ヒ巴ムヲ得サレニ出テタルヲ列テ以テ彼レト同起因ニ出
ツルヲ証セント欲ス
但シ日本ノ利息制限法ニハ猶ホ一割ニ分一割五分乃至二割ノ
利子ヲ許サレタルハ今茲ニ顧ミサル能ハサルモノナリ夫レ農
夫耕作ノ純益ハ一千八百七十七年一月四日以前大藏省ノ算定
ニ後ハハ唯々六分ニ當リシノミ又同年同月同日以後ハ漸ク七
分ニ至リ得ルノミ請フ今之レヲ算數上ニ徴シ尚ホ其詳カナル

ヲ示サン
既ニ上文ニ於テ毎年平均ノ全收穫高ヲ以テ一百ト假定セシガ
豊山平均ノ年ニ於テコソ此内ヨリ納稅其他諸入費ヲ引テ尚ホ
五十九、五ノ有餘有リテ以テ其地所買入資金ノ利子ニ當ルヲ得
ベシト然レ凶年ニ於テハ仮令ハ彼ノ平均假定數百分ノ唯々三
十四、五ニ止マルアリ更ニ詳言セバ平均ノ年ニハ大藏省ノ算定
ニ本ツキ資金ノ利子トシ餘ス所七分ナルベキモ凶年ニハ唯々
四分ノ利子ヲ得ルノミ蓋シ五十九、五ト三十四、五ハ猶ホ七ト四
ノ如キ同比例ニ居レバナリ今此ニ一例ヲ列カンニ則テ一農有
リ代價五百円ノ地ヲ所有ス地租算方ニ從ヒ其ノ純益三十五円
アリト云フ會々該農夫ニ告クル者アリ曰ク若シ子牛羊ヲ蓄ヒ
其ノ所有地ヲ以テ牧場トセハ蓋シ利益ヲ得ルコト今日ニ數倍セ
ント於是乎該夫ハ毎年一割五分付ノ利子ヲ以テ二百円ヲ借リ

以テ牛羊ヲ買フ因テ謂ラク得ル所ノ利潤ハ蓋シ一割五分ノ利
子ニ超ユルト迫カニ多カルベシト豈圖ラシヤ不幸ニコレ歎
ノ流行スルニ際シ其ノ歎一時ニ死セシ復タ一ノ利ヲ得ル能ハ
ス遺ス所ノモノハ唯々往キノ負債ノミ故ニ設クシ談夫コレテ
收蓄セス且ツ此ノ不幸ニ罹ラザラシムルモ火災洪水其他不時
ノ災難ニ依リ右ノ高二百円ノ負債ヲ為スアアルベシニ耕作
上ノ純益ハ前ノ如ク唯々三十五円ナルヲ以テ其ノ利子ヲ拵フ
ノ外餘ス所ハ僅カニ五円ノミ之レヲ以テ自家須要ノ供給ニ充
テハ豈能ク其ノ需用ヲ達シ得ヤキモノナルヤ或ハ凶歳有リ百
円ノ地價ニ付キ唯々純益四円ヲ得バ五百円ノ地ニシテ純益總
高僅カニ二十四ノミ而シテ内五円ハ前ニ言ヘル如ク其ノ需用
費トシ之レヲ引ク時ハ残り則チ十五円ナリ然ルニ彼ノ負債ノ
利子ハ三十四円ナルカ故ニ利子ノ半ヲ猶ホ法滞セサル能ハス其

利子法滞シテ償ハサル故ニ都合二百十五円ノ負債ヲ以テ債主
ノ手中ニ籠絡セラレ弊ト更ニ延期ヲ請ハサル能ハス此ニ於テ
カ債主壟斷ヲ肆ニシ負債遂ニ積テ二百五十円ニ非サレハ乃チ
三百円ニ至ルナラン蓋シ該負債者ハ一凶年ノ為メニ重ク損害
ヲ受ケシヨリ其ノ負債ヲ脱シ難ク且ツ重税ノ為メニ愈々産力
ニ奪ハレ豊年ニ於テハ漸ク納税ノ義務ヲ充テ得ヤキモ教年経
過間屢々不熟有リ其ノ負債倍々加フルニ至ラバ財産物岳終ニ
餘ス所ナク拳テ之レヲ亡フニ至ルベシ是レ適々豊年ニ會スト
イハレ重税ノ為メニ餘贏ヲ積ミ非常ノ豫備ト為ス能ハサルガ
故ニ從テ此ノ負債モ亦終ニ全ク償却シ能ハザルニ至ルモノナ
リ茲ニ謹テ一考ニ参考ニ供フヘキモノアリ蓋シ火災保險歎
ハル所ノ方法ニ外ナラズ則チ貯蓄積ヲ為ス方ナリ
夫レ地租ノ重キニ過ル利息制限法ノ設ケアルト半額永納ノ思

典テルトニ拘ハラズ農民ノ地所ハ往々債主ノ手中ニ帰セシ
恰モ印度ニ於ケル如キ危殆ノ状態或ハ免カレ難キヲ恐レ右印
度ノ証據ヲ舉ゲテ日本現今ノ状ニ比シテ并セラ政州各國ノ比例
ヲ取り謹テ参考ニ供スルモノナリ
尤モ日本政府ハ已ニ自ラ其ノ地租ノ高キニ過クテヲ洞察シ
累キニ一千八百七十三年ノ布令ヲ以テ尠餘ノ収入増殖シ稍々
不足ナキニ及ハバ直ニ地租ヲ減シテ将来唯々百分ノ一ト為
スヘキ旨ヲ示サレタリ然レニ其ノ明示セラレタル減税ノ目的
ハ厥ヲニ當時財務ノ急ナシニ依リ未タ舉行スルニ及ハザル
ト見ユ故ニ僕ハ以下ノ数條ニ於テ猶ホ日本地租ノ重キニ過キ
ムテ其ノ安全ヲ害スル状ヲ明陳シ傍ラ匡救ノ術ヲ演ヘ又未部
ニ至リ酒造及ヒ其ノ連税ノ状況ヲ陳ヘ酒類官賣ノ法ヲ設ケ以
テ其ノ弊ヲ濟ハント欲ス

